

西藏旅行記 2

幸田 和彦

2019 TIBET TOUR

空港では、息苦しさと共に寒さが襲ってきた。日本はもちろん、上海も西安も猛暑にうだっていたためラサまでの服装は夏仕様である。イミグレーションを通過するととりあえずサンダル履きのまま靴下をはき、インナーにダウンを着るとウインドブレーカーのジッパーを急いであげた。「寒さを感じる前に着込みましょう。寒いとそれだけ体が酸素を使ってしまうですよ。」という前夜の渡部さんの言葉が私を焦らせた。

空港では現地ガイドのダワさんが迎えてくれた。見るからにエネルギッシュな感じのする中年男性。「日本名は小寺康夫です。」と流ちょうな日本語で自己紹介。この日本名は日本語学校でつけてもらった名前だそうだ。ラサを目指すマイクロバスに乗り込んだ後は彼の独壇場となった。速射砲のようにチベットに関する話が繰り出される。チベットを愛

するダワさんの人柄が伝わってきた。話は刺激的で魅力的だったが、初めて体験する高度に体が戦っている私はメモを取る余力もない。深呼吸を繰り返し、寒さに負けまいと身を締め、配られた水を飲み、高山病にひたすら怯える車中であつた。

ホテルで一休みした後、高所順応と夕食を兼ねてラサ旧市街の散策へと出かけた。ラサはチベット族が居住する旧市街と漢民族が居住する新市街とから成っているようだ。道には車が溢れ、クラクションが鳴り止まない。驚くことにベンツやポルシェといった高級車の占める割合がかなり高い。ほとんどが中国からの観光客の車だとダワさんが教えてくれた。中国の富裕層が訪れる観光地としてのチベット。高級車がひしめく道路から現在のチベットの一面を見た気がした。

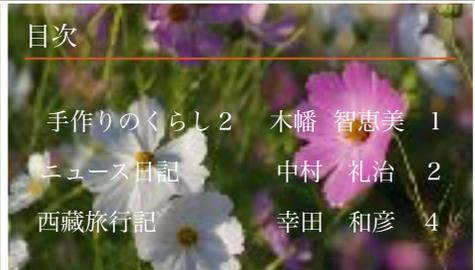
3名で発表をし、15日は子どもたちの寄席の実演をしました。話がもちあがる1年前までこんな展開になろうとは夢にも思いませんでした。

学会での発表なんてこれが最初で最後だろうなあ、と、何だかこの成り行きがおもしろくて、緊張も感じることなく話しました。子どもたちも堂々としたものでした。

編集人より

「にこにこ寄席」東京公演無事に終了しました。当日会場においでくださった皆さま、広報にご協力いただいた皆さま、心にとめてくださった皆さまに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

14日は、「地域における学校の役割—極小規模校高尾小の実践—」というテーマで



手作りのくらし 2 22 パンツ(1) 木幡智恵美

この冬は例年より暖かく、屋根がうつつら白くなっただけで積雪はなかった。それなのに、我が家や娘の一家にはインフルエンザの嵐が吹いた。娘の家族では、一番小さい実歩、我が家では一番細い私だけがインフルエンザを免れた。ところが、その2人が春先からしつこい風邪に罹ってしまった。実歩の方は、熱のある2日ほどあずかり、あとは薬を飲みながら保育所には通った。子どもなので回復は早く、咳や痰は出るものの、元気に遊び、機嫌もよかった。私の方は年のせいか、3月末から喉が痛み出し、そのうち咳がひどくなり、度々痰が絡まるとまた症状が出、また薬をもらいに行き、切れると再発しを幾度も繰り返した。一番の難点は、身体がだるくて何をやる気にもなれないことだ。最低限の家事はこなすものの、散歩に出る気にもなれず、武道館に行く元気も出なくなってしまった。やはり、冬の寒さを乗り切らないと、身体が鈍って耐性がなくなってしまうのだろうか。

というのも、私と同じようにこの春から初夏にかけて風邪が長引いているという人の話を何人か聞いたからだ。

ぐずぐずしているうちに、実歩の誕生日が近づいてくる。鈍くなった頭で、何とか思いついたのは、保育所に着ていくパンツだ。スカートは止められているらしい。それでいつも寛大のお下がりの黒っぽいパンツばかりはいている。もう少し女の子らしいのをはかせてやりたい。と、頭の中で思いつつ、その先の動きがなかなかだ。ようやく動き出したのは、4度目の通院で薬をもらい、少し元気が出てからだった。「抵抗力が落ちてますね。味覚が無くなってるのとことだけど、血中の亜鉛が不足しているのでしょう。薬を出しておきます」と、医者から言われ、原因が分かって安心したせいもある。

久々に、服地を求めに行った。実歩の顔を思い浮かべながら、綿100パーセントのプリント地を見て回る。それだけで、身体の内から少しずつ活力が湧いてきた。

ニュース日記 707

自由と権力

中村礼治

30代フリーター やあ、ジイさん。香港のデモが止まらない。

年金生活者 この運動の特徴のひとつは、掲げられた要求のほとんどが警察に関係していることだ。運動の発端となった逃亡犯条例改正案の撤回がそうだし、途中で加えられた4項目の要求のうち3項目までが警察に関わるものとなっている。5項目の要求を列挙してみる。

1. 逃亡犯条例改正案の完全撤回
2. 市民活動を「暴動」とする警察と政府の見解の撤回
3. デモ参加者の逮捕、起訴の中止
4. 警察の暴力的制圧の責任追及と外部調査実施
5. 林鄭月娥の行政長官辞任と民主的選挙の実現

このうち4番目までが警察がらみだ。香港市民の最も切実な要求が自由を守ることだということをそれは物語っている。近代社会では警察は自由の守り手であると同時に自由の拘束者でもあるという両面性を持っている。どちらに傾くかによって社会の自由度が左右される。デモが常態化した香港では、警察は常にそれを規制する存在として市民の前に現われる。自由を守る仕事よりも、自由を制限する仕事前面に出る。その姿が独裁中国と重なり、市民は反発を募らせる。

30代 自由を保障する仕組みは自由を抑圧する権力と表裏一体をなしているということか。

年金 国家は人間の自由への希求が生み出したもののひとつだ。対外的には他の国家による侵略から、そして対内的には犯罪や飢えから国民の生存の自由を守る役割を担ってきた。そのための装置が軍隊であり、警察であり、富を再分配する税財務の役所だ。それらを機能させるためには、国民の自由の部分的な侵害を避けられない。それが過剰になったのがいまの香港の警察だ。

30代 だれの、どんな自由も侵害しない自由というのは夢にすぎないのか。

年金 人類の歴史が全体として自由を拡張する方向に進んできたことも確かだ。それを将来に向けて延長すれば、夢は次第に現実化していくと考えることができる。その希望を抱かせるのが、いま進行しつつある富の稀少性の縮減だ。

30代 香港のデモにはリーダーがいないそうだな。

年金 運動の参加者のひとりで香港中文大学副教授の肩書を持つ周保松という政治哲学の研究者が、それについて朝日新聞でインタビューに答えている（9月10日朝刊）

「私自身、不思議に思います。雨傘運動は数人のリーダーがいました。今回はネット

でつながり、意見交換をしているだけ。催涙ガスを防ぐマスクをして集まり、互いに誰か知らないまま、一緒にいる。誰が主催しているのかも知らない。でも互いに信頼している。何か運動が提起されると、1週間後に十数万人が参加する。創意工夫を凝らして長期、大規模に闘っています。世界史においてまれな運動ではないでしょうか」

5年前の雨傘運動は行政長官の普通選挙を要求する運動だった。それは政治的な選択の自由を求める運動だったが、その自由は選挙に限定された自由で、市民の日々の生活には直接かかわりのないものだった。言い換えれば、生活よりも民主主義という理念の問題だった。そのための運動を起こし、継続していくには、一般市民には普段なじみの薄い民主主義の理念に通じただれかがリーダーとなって、市民に呼びかける必要があった。

これに対して、いまの運動は日常生活に直接かかわる自由を要求するものだ。運動の発端となった逃亡犯条例の改正案は、いつ市民が自由のない中国に送られるかわからない恐怖を人びとに与えた。途中で加えられた他の要求にも、いつ警察に自由を奪われるかわからない状態を拒絶する市民の意思が集約されている。リーダーの呼びかけがなくても、一般の市民が立ち上がっている理由がそこにある。

30代 香港で警察と衝突するデモ隊を「暴徒」と呼び、彼らを日本の60年安保闘争の全学連と重ね合わせながら、その「暴力」が中国による武力弾圧を誘うのではないかと懸念するブログを見かけた。

年金 60年安保で国会構内に突入した全学連主流派は当時の新聞にこぞって批判された。この戦いは岸内閣を退陣に追い込んだものの、学生たちが目指した安保改定阻止は果たせなかった。もし彼らがおとなしいデモだけしていたら、内閣の退陣すらなかっただろう。

それと同様に、もし香港の若者らが行儀のいいデモだけして、警察との衝突も、立法会への突入も、空港の占拠も避けていたら、逃亡犯条例改正案の撤回を勝ち取ることはできなかっただろう。彼らの行動が社会秩序を揺るがすのを目の当たりにして初めて香港政府、北京政府は妥協を決断したと推察される。

デモ隊と警察の衝突を「暴力」と呼ぶのなら、「暴力」は権力関係が目に見える形を取ったものだ。デモ隊は「暴力」によっていわば臨時的権力を手中にし、政府の権力に対抗した。彼らの「暴力」は香港政府、北京政府に対する一般市民の不信に支えられていた。

60年安保の「暴力」学生らが批判にさら